

やすらぎ通信

第17号 (平成24年4月1日) 発行: 大阪府立急性期・総合医療センター

卯月(田植苗月たうえなへづき)

四季のうた

荒木とよひさ 作詞 作曲

春を愛する人は 心清き人

すみれの花のような 僕の友だち

夏を愛する人は 心強き人

岩をくだく波のような 僕の父親

秋を愛する人は 心深き人

愛を語るハイネのような 僕の恋人

冬を愛する人は 心広き人

根雪をとかず大地のような 僕の母親

ランララ……… ランララ………

今年も桜の季節の到来とともに一年で最も美しい季節を迎えました。これから初夏にかけ、万代池では小さいながらも多くのスポットで毎日木々や花、鳥たち、虫たちの若々しい生命の躍動感が聞こえてきます。大都会の中で多くの命と出会う貴重なオアシス、お弁当でも持って足を運ばれ、是非春の暖かさを自然のなかで楽しんでいただければと思います。

大地震・大津波・原発事故により大惨事を引き起こした「3.11」大災害から1年。先月には各放送局や新聞は「震災後1年」の特集報道を行っていました。その中で改めて「3.11」大災害による被害の深刻さ、被害を受けた方々の多さ、被害エリアの大きさを再認識させられた方が多かつたのではないのでしょうか。そして、17年前の神戸と最も違うのは復興のスピードの遅さだということを各報道は浮き彫りにしていました。中でも復興を妨げている最大の要因は瓦礫（特に放射性瓦礫）の処理と今もなお収束の見込みが立っていない原発事故だと言われています。一日も早い原発の避難区域の解消と、住み慣れた地域への帰郷の目途が立つことが望まれています。個々には、仮設商店街の開設や、漁業、養殖漁業の一部再開などの明るい話題もありますが、総じて非常に厳しい状況は続いています。

先月にNHK ラジオ深夜便「明日へのことば」は「復興インタビュー」と題して一週間にわたって「3.11」に関わりの深い方々のインタビューを放送していました。そのなかで、作家の玄侑宗久さんがおっしゃっておられたお話しが印象に残りました。玄侑さんは福島県三春町の臨済宗福聚寺の住職で、被災地住民の声を反映するために政府の東日本復興構想委員会委員に就任され、復興プランづくりに取り組まれました。

そのなかで、放射能を浴びた福島県であるがゆえに、それを逆にとった最先端の放射線科学の研究機能を集積し、また温泉地が多いことから、その研究機能と温泉地をリンクさせて滞在型の研究施設を集積をねらいとする「特区」を福島県に作ることをその委員会で提案をされました。「神戸の震災のときに（神戸市は国の協力のもとで復興を目指すためにポートアイランドに）新しい（医療産業）特区を作って（多くの最先端の研究機関や企業などが集積し）成功しました。福島も、放射線に関係する最先端の研究機関と温泉によるリゾート機能とを兼ね備えた特区にすることにより、福島の復興につなげていければということです。」と玄侑さんは話されています。

ところで、玄侑さんのお寺は三春町にあります。地震の被害に関してはこの三春町は周辺の郡山市などと比べて比較的軽度であったと話されています。お寺の塀やお地藏さん、墓石はかなり倒壊したそうですが、本堂はびくともせず無事で、またライフラインも無事であったとおっしゃっています。このため、震災直後は約2000人の多くの被災者の方が避難されたと話しておられます。

ところで、お寺の本堂が倒壊しなかった理由として玄侑さんは日本古来の寺院建築

の特徴を上げておられました。「本堂は、礎石の上に柱、上部は全てほぞ組みという構造です。この構造が、礎石部で揺れを吸収し、上のほぞが締まるという構造です。これで地震に耐えることができたのです。」

ここで、話は横にそれますが、少し日本の寺院建築のお話をさせていただきます。

日本の寺院建築は古来すべて基本的にこの玄侑さんがおっしゃった構造—金属を使用しない技法—で作られ、この構造は非常に地震に強いと言われております。皆さん方の中には、五重塔が地震に強いということを聞かれたことがある方がいらっしゃると思います。実は、五重塔は、日本古来の知恵でできた完全な耐震性を備えた建築物であると専門家からも高く評価されているのです。その耐震性との関係で最もよく知られているのが心柱という、塔の最上部から最下部の礎石まで建物の真ん中に設置されている柱です。この柱の上部は建物を支える4本の柱と連結されていますが、最下部は礎石（実際は「舍利」と言ってお釈迦さんの分骨が安置されている礎石）の上に載せるように置かれています。実際には直接礎石には接しておらず隙間をあけています。この構造が、地震の際の揺れを吸収し、建物全体のバランスを保ち、地震による塔へのダメージを極力最小化する機能を果たしていると言われております。（この心柱は現在建設中の東京スカイツリーにも取り入れられました。）

飛鳥・天平時代の奈良には、「南都7大寺」と言われるような大きな伽藍配置を持つ寺が次々と建てられました。当時の典型的な伽藍配置は、中心に金堂、塔、それを囲むように、講堂、回廊、門、さらにお寺の入り口は南大門というのが通例の伽藍配置です。そのなかで、お寺のシンボルとなったのが、天にそびえ立つ塔です。奈良の都は当時「塔だらけ」と言ってもいいくらい、奈良盆地にはあちこちに塔が林立していました。ところが、一見地震に弱そうに見える塔や金堂などの大建築物は、歴史上少しも地震の被害は受けていないのです。

ここに、当時すでに日本の木造建築技術が、世界で最も高いレベルにまで発展していたことが伺えます。金属を一切使用しない建築技術、「ほぞ」や「ほぞ穴」による木組、地震の揺れを吸収する心柱など独特の耐震性の高い木造建築技術が確立され、多くの大伽藍が建築されたのです。

先月まで、読売新聞に「時代の証言者—寺を建てる 瀧川昭雄」というコラムが連載されておりました。瀧川さんは、今日の寺院建築の日本の第一人者で、これまで、モンゴルやカナダ、香港、中国などでも仏教寺院の建築、修理に携わられ、現在は興福寺が進めている中金堂再建という大プロジェクトに携わっておられます。瀧川さんはその中で「金属を使用しない伝統的な日本の木造建築技術で建てられた建築物は定期的に修理をしていけば1000年以上持ちます。しかし、金属を用いて建てた建築物はせいぜい300年持てばいいところです。金属が錆びて弱くなりますし、金属を入れた

場所から木は必ず割れてきます。」と話されていました。

ところで、南都7大寺などと呼ばれた当時の壮麗なる伽藍の消失理由は何だったのでしょうか。それは、台風風の風と雷、されには戦火だったのです。中でも落雷による火災は、次々と起こり最大の寺院建築の消失理由になりました。当時の寺院がいかにか、それら風と雷を恐れていたか、それを証明しているものが法隆寺の五重塔の中にあります。

法隆寺は1993年に日本で最初のUNESCOの世界遺産に登録されました。これは、世界最古の木造建築と言われております金堂、五重塔、中門が残され、また、2300以上のもの国宝、重要文化財が残存しているからです。ところが、この金堂等もオリジナルではないのです。607年の創建当時の金堂等は670年の落雷による法隆寺全域の焼失によりなくなりました。しかし、その後8世紀初頭までに、法隆寺は再建されます。

そして、以降法隆寺も度々自然災害に見舞われるのですが、この金堂、五重塔、中門だけは生き残って現在に至ってします。

その中の法隆寺の五重塔の一番上の九輪のすそに付けられている4本の鎌が、当時の人々がいかにか風と雷を恐れていたかを表しているものなのです。鎌は、上空を威嚇するかのごとく付けられていますが、実はこの鎌は「風よけ」「雷よけ」のために取り付けられました。当時のものの考え方は、台風や落雷のような自然災害は怨霊の「祟り」によって起こると信じられていました。この怨霊を鎌で退治し、建物を風と雷から守るというわけです。如何に当時の人々が地震ではなく、台風風の風と落雷を恐れていたかを物語る貴重な文化遺産です。

また、奈良の仏教寺院は、戦火でも大変なダメージを歴史的に受けてきました。現在NHK大河ドラマで平清盛が取り上げられていますが、歴史上、東大寺、興福寺は平清盛による「南都焼打ち」により当時の伽藍をほとんど焼失させてしまうという大変な災難を受けています。

なぜ清盛が東大寺や興福寺を焼打ちにしたのでしょうか。平清盛は、藤原氏に象徴される旧貴族勢力に代わって新しく台頭してきた武家勢力の総大将です。政治体制の大変革、いわば革命を起こそうとした勢力です。これは推論ですが、そういう革命勢力の旗頭の清盛に、東大寺はどのように映ったのでしょうか。東大寺は聖武天皇の時代に勅願の総国分寺として建てられました。国分寺と言うのは今流に言えば国立寺院です。

総国分寺というのは、そのなかのトップ、キリスト教で言えばバチカンのローマ法王庁みたいなものなのでしょう。こうした東大寺の地位は、清盛の眼には旧支配勢力である藤原氏を代表とする貴族勢力の権威や権力の象徴として映ったのではないのでしょうか。清盛は、命じて創建当時の東大寺や興福寺の伽藍をほとんど焼きつくさせました。こうした、戦火による寺院建築の消失は戦国時代にもありました。

自然災害とりわけ落雷による火災と戦火により、南都7大寺と言われた大伽藍はほとんど姿を消し今日に至っているのです。

長々と寺院建築の話に寄り道をしてしまいました。ここで、話を震災に戻させていただきます。今、東北の被災地の復興を妨げている最大の理由の一つは瓦礫、特に放射能が降った瓦礫の処理です。玄侑さんは「復興というところかなり長期の時間を見据えたこととなりますが、被災地では長期スパンで考える復興とは別に（がれきの処理のように）当面今すぐに解決が迫られている喫緊の課題があるわけです。そうした課題については、政府が責任をもって強力に進めるといえることが必要だと思います。これは沖縄の問題にも共通します。総論においては沖縄の基地を減らすことにはみんな賛成しますが、いざ自分のところに持ってくるとなるとみんな反対します。震災瓦礫でも同じことが起こっています。こういう問題については、成田空港建設が大変参考になります。当時成田空港建設を巡っては、かなり大きな反対運動がありました。しかし、国として成田空港が必要と判断した以上、当時の政府は反対する人たちの人権を押し付けてでも強力で事業を進め開港にこぎつけました。その決断がなければ今の成田空港はなかったのです。震災瓦礫についても政府がそのような判断をして強力で押し進めるべきです。」と話されました。

この玄侑さんの発言は本質をついた大変勇気のある発言で、発言できない多くの被災者の方々の心中を代表して吐露されたものだと思います。今、東北の復興を前に進めるには瓦礫処理は避けて通れない問題であり、それを責任をもって強力で前に進めない政府の腰の引けた対応に対するはがゆさと激しい怒りが玄侑さんの発言の裏には感じ取れました。それと同時に、これは玄侑さんから私たち被災地以外に住む国民に突き付けられた課題でもあったと感じました。瓦礫の処理率はまだ10%~20%という状況で全く復興が進まないという現実に対し、どのように答えを出していくのかが今問われています。

被災者の方々は、突然起こった大災害により、愛すべき家族、生活の基盤である家や財産、仕事など全て奪われ、その中で深い苦しみ、痛み、悲しみを持ちながらも、明日への希望をなんとか見出そうと必死で耐え頑張っておられます。東北人の不屈の忍耐力、精神力をその中に見出しておられる方も多いのではないのでしょうか。

しかし、その不屈の忍耐力、精神力をもってしても、政府の力とともに全国民の理解や支援がなければ、復興というレベルにはなかなか到達できません。

被災地以外に住む私たちは、今、なお継続している災害として「3.11」を見つめ直し、被災者が背負っておられる「苦しみ、痛み、悲しみ」という重荷を、同じ日本人として、私たちもともに背負うという気持ちを持つことが求められているのではないのでしょうか。

今日、日本の世界におけるポジションは、大きく低下しています。周辺の諸国からは足元を見られ、また長年の同盟国であるアメリカからの信用も大きく崩れているように思われます。

しかし、未曾有の大災害に立ち向かい、国も自治体も企業も国民もあげて、復興に取り組み、立派にやり遂げれば、世界の国の指導者や人々の日本を見る目も大きく変わるはずです。日本が世界の中での占める地位は再び上昇し、厳しい逆境から国をあげての取り組みにより見事に復興を遂げた国として、世界史にも残ることにもなると思います。それは、かつて日本が世界市場を制覇した「経済力」によってではなく、日本人が心を合わせて逆境に立ち向かい、それを見事に克服し国家を再建したという日本人が持つ「高い精神性」に世界の人々から賞賛と尊敬が得られることになるのではないのでしょうか。それが、同時に日本人としての誇りと自信を取り戻す道にもつながると思います。これから日本を背負う子どもたちのためにも頑張りましょう。

さて、4月は病院に取りましても人事異動のシーズンです。多くのフレッシュマンが私たちの仲間に加わります。当センターでは病院の経営基盤の安定化とともに、その成果を病院の診療機能の一層の充実に充てることができるようになりました。

PET-CT やリニアック、より低侵襲の外科手術ができる手術ロボット・ダビンチなどの高度医療機器の整備もその一環ですが、合わせて医療を担う医師、看護師などのマンパワー面でも、多くの優秀なスタッフの増員が可能となりました。その結果、今年度は前年度に比べ、医師（レジデントも含め）が22名、看護師26名、薬剤師3名、診療放射線技師5名、臨床検査技師1名、臨床工学技士2名、理学療法士5名、作業療法士3名、言語聴覚士1名の合計68名もの増員を行っております。こうしたマンパワーの充実を背景に4月からは「総合内科」の新設、二つの高度医療センター「関節リウマチ・バイオサポートセンター」「低侵襲心血管治療センター」の立ち上げ、従来の三次救急医療に加え、二次救急医療への本格参入（神経内科、脳神経外科、心臓内科、心臓血管外科、消化器内科、小児科、整形外科）、PET-CT 検査の本格稼働など診療機能が一層強化されることとなります。

皆さん方のご期待に応えられますよう、これからもセンターを上げて取り組んでまいりたいと考えておりますのでよろしくお願いいたします。

NEWS

【(新)高度医療センター—低侵襲心血管治療センターを開設しました—心臓血管外科】

このたび、腹部や胸部の大動脈瘤や大動脈解離の治療に当たって開腹(胸)手術をせず、ステントを挿入することによって治療する「ステントグラフト」治療を行う「低侵襲心血管治療センター」を開設しました。この治療により患者さんの体の負担が軽減され回復時間が短縮されることとなります。

詳しくは次号でお知らせします。

【(継)関節リウマチ・バイオサポートセンターを開設しました！—免疫リウマチ科—】

関節リウマチの治療に非常に効果の高い生物学的製剤が開発され、近年多く治療に使われ出したことから、地域の医療機関でも安全性を確保しながら治療を行うことが可能となるようサポートさせていただく「関節リウマチ・バイオサポートセンター」をこのたび開設しました。

設置に当たっての免疫リウマチ科主任部長からのメッセージをご紹介します。

<関節リウマチ・バイオサポートセンターの設立にあたって>

免疫リウマチ科 主任部長 藤原 弘士

「関節リウマチでは、激しい関節の痛みや変形による動作の不自由さから、患者さんはつらい思いをされます。しかしながら今では治療も進歩し、とりわけ生物学的製剤という新しいお薬によって、関節リウマチの多くの患者さんが良くなり、一部の患者さんでは治癒される方もみられるようになってきました。

その一方で、生物学的製剤を使用すると、半年間で数パーセントの確率で、重篤な副作用が生じることも事実で、その副作用の予防や治療も非常に重要です。

そこで、私たちはこのような非常によく効く生物学的製剤を、患者さんと主治医の先生方に安全にそして安心してご使用していただけるように支援することを目指した関節リウマチ・バイオサポートセンターを今月1日をもって開設しました。

これまで以上に、多くの患者さんが現在の関節リウマチ治療の進歩の恩恵を受けることができるように努めさせていただきますのでよろしくお願い申し上げます。」

【(継) “総合内科”を開設しました！】

当センターにおける内科系診療科は、臓器・疾患別に専門内科に分かれて診察を行ってききました。しかし、来院時に診断の明らかでない患者さんや、専門領域の境界、あるいは重なる疾患をかかえておられる患者さんも多く見られることから、これらを総合的に診断し治療するとともに、的確な診療科を判断するための診療科の新設の必要性が高まってまいりました。また、感染性疾患の多様化やアウトブレイクの危機の増大など、今日感染症に対する診断機能の強化の必要性も高まってきております。

こうした要請に応えるとともに、当センターの医療水準を一層強化することなどを目的に、今月から新たに「総合内科」を新設し、診療を開始しました。

【(継)新たに頭頸部がんのIMRT治療を始めました！—放射線治療科—】

IMRT(強度変調放射線治療)は、周辺の正常組織の線量を減らし合併症のリスク低減に画期的な方法です。昨年11月から前立腺癌に対するIMRTの保険診療を開始しましたが、今からは適応拡大して頭頸部癌のIMRTを開始しました。頭頸部癌では脳・脊髄・唾液腺など重要臓器が複雑に関係し、通常の放射線治療では唾液腺障害が必発です。さらに腫瘍に対しても十分な線量を投与することが難しいケースもあります。IMRTの技術を用いればこれらが解決し、腫瘍制御率向上だけでなく患者さんのQOL維持にも役立ちます。

主な対象疾患は咽頭癌です。適応など詳細については放射線治療科もしくは耳鼻咽喉・頭頸部外科までお問い合わせ下さい。

【(継)PET-CT 今月から地域の医療機関からの検査受付を開始しました！—画像診断科】

当センターでは、がん診療の充実をめざし、診断精度の一層の高度化を図るために、これまで外部に検査を依頼していたPET検査を内部で可能となるようPET-CTの整備を進めてきました。先月から患者さんの撮影を開始しておりますが、今からは地域の医療機関からの撮影依頼も受け付けます。

なお、当センターのPET-CTは検診依頼には対応しておりませんのでご注意ください。

お問い合わせは画像診断科 RI(核医学)・PET検査室まで。

【(継)土曜日の「地域予約」受付を開始します—地域医療連携室】

地域医療連携室では、土曜日にも「地域予約」のご依頼に対応させていただいております。「地域予約」をお取りいただくことで診察の待ち時間を短縮し、患者さんによりスムーズに受診いただくことができます。是非ご利用ください。

〈地域予約受付時間〉 月曜日～金曜日 9:00～19:30
土曜日 9:00～12:30
(年末年始、祝祭日を除く)

〈電話番号〉 06-6606-7014

〈 FAX 〉 06-6693-4143

【(新) 今月から「医療相談」コールセンターの電話を増設しました—地域医療連携室】

患者さんやご家族などからの医療や病院利用に関するご相談を、専門の看護師が電話でご相談に応じる「医療相談」コールセンターの電話を1本増設しました。待ち時間がほとんど

どなくなりますのでお気軽にご利用ください。

電話番号	06-6692-2800	(専用電話回線)
新たに開設!	06-6692-2801	(専用電話回線)
相談日時	月曜日～金曜日	
	午前9時～午後5時	
相談対象	医療相談を希望されるご本人若しくはご家族等	
相談員	看護師	

【(再) 診察予約変更センター

11の診療科において診察の予約日・時間の変更を電話で受け付けています!

当センターでは、昨年6月から11診療科を対象に、電話で診察時間の予約の変更ができるよう「診察予約変更センター」を設置しています。

これは、当センターが進めています「患者さんにとって利便性の高い病院づくり」の一環として導入整備したもので、急な用事や体調変化で予約された日時に診察のために来院できなくなった場合に、電話で日時の変更ができるサービスをご提供するものです。

予約変更を電話でできるのは、以下の診療科です。是非、積極的にご活用ください。

なお、このサービスは初診に関しては行っておりませんので、ご注意ください。よろしくお願いいたします。

(電話番号) 06-6692-1201(代表)にダイヤルして
「予約変更センター」と言ってください。

(受付時間) 午後3時～午後5時(平日のみ)

(対象診療科) 内科・呼吸器内科 消化器内科 糖尿病代謝内科 整形外科
免疫リウマチ科 皮膚科 形成外科 腎臓・高血圧内科
神経内科 脳神経外科 耳鼻咽喉・頭頸部外科

【(再)入院治療費の概算を予めお知らせしています】

当センターにおきましては、入院患者さんへのサポートを総合的・集約的に行う入院センター(やすらぎセンター)におきまして、ご入院申し込み時に予め標準的な治療を行った場合の概算費用をお知らせするサービスを行っています。

今月の催し

【(継) 予告：第6回やすらぎ亭寄席—若手女流！のホープ 旭堂小二三の講談会】

日 時 4月23日(月) 午後2時～

場 所 3階講堂

出 演 旭堂 小二三

主 催 万代やすらぎ亭

(入場無料)

【(新) 今月のすこやかセミナー】

気を付けよう低栄養—あなたの食事は大丈夫—

日 時 4月27日(金) 午前11時～12時

場 所 3階保健教室

講 師 栄養管理室管理栄養士 貴志 菜穂子

(参加無料)

【(新) 大好評！！】

相愛大学連携・外来糖尿病教室～知って得する！糖尿病の付き合いかた～】

日 時 4月18日(水) 午後2時～3時30分

場 所 1階アトリウム

内 容 (1) 三日坊主のあなたにおすすめ！～スローな減量法～

糖尿病代謝内科医師 片岡 隆太郎

(2) 糖尿病と血圧の関係—血圧ってなんぼやったらいいの？

糖尿病認定看護師 後藤 博美

(3) 考えよう、主食・主菜・副菜

栄養管理室管理栄養士 笠井 香織

【(継) 現代美術空間・病院ギャラリー 第5回企画展 開催】

「やすらぎの木版作家—浅野竹二ニューモアとペーソスの自由版画展—」

日 時 平成23年12月26日(月)～平成24年6月22日(金)

場 所 本館2階ギャラリー (入場無料)

浅野竹二は、1900年京都生まれ。京都市立絵画専門学校で日本画を学んだ後、油絵を始めますが、再び日本画を描き始め、日本画家として活躍します。1930年頃からは、木版画の制作を始め、写実的な「名所絵

版画」を制作する一方で、自由に自分の感性を表現した『創作版画』を制作し、大胆なフォルムと色彩で構成されたユーモア溢れる作品を発表しました。

今回は「ユーモアとペーソスの自由版画展」と題して、これまで展示してきた情景版画とは全く異なる軟らかく暖かい情緒豊かな自由版画をお楽しみいただきます。

なお、本企画展は大阪府立現代美術センターのご協力を得て開催しております。

【(新) 予告：前田藤四郎「昭和モダニズム」・元永定正「色彩の魔術」版画二人展】

前田藤四郎（1904－1990）は、兵庫県生まれで神戸高商（現神戸大学）を卒業した後松坂屋宣伝部に入社。商業美術に携わる一方独習で版画の世界に。主に関西を中心に、木版をベースに、リノリウムやシルクスクリーンをも使用し、油彩絵具で刷り上げる独特の明快な作風を確立。昭和の大阪のモダニズムを代表する版画家となった。

元永定正（1922－2011）は、三重県生まれで、55年に関西を拠点とする前衛美術集団「具体美術協会」に参加し、吉原治郎に師事。偶然性を取り入れた抽象的なオブジェや平面作品を制作。おおらかでユーモアあふれる作風を確立する一方、70年代からは版画制作にも意欲的に取り組み、自作へのネーミングには抜群のセンスを発揮。

今回の企画展では、関西を代表した二人の巨匠の作品を同時展示します。是非、お楽しみにお待ちください。

日 時 6月25日（月）～ 12月21日（金）

場 所 本館2階現代美術空間一病院ギャラリー

【(新) 予告：芦屋市美術協会会員一小林芳夫写真展～邂逅の世界から～】

当センターの前身である旧大阪府立病院で心臓疾患の専門医（1998年、心疾患診療科部長で退職）として勤務していた小林芳夫氏が、退職後に本格的に写真家として活動を開始。今日まで日本国内のみならず、アジア、ヨーロッパ、北アメリカ、オーストラリア、ニュージーランドなど世界各地で撮影を行い、10年ごとに3冊の写真集「邂逅」「邂逅Ⅱ」「邂逅Ⅲ」を出版（1作目は自費出版）。多くの作品を大阪大学などに寄贈されるなか、氏の手元に残された秀作14点の写真展を「前田藤四郎・元永定正版画二人展」と同時開催します。

日 時 6月25日（月）～ 12月21日（金）

場 所 本館2階現代美術空間一病院ギャラリー

【(予告) 府民公開講座—認知症の治療とケア—】

—認知症なんて怖くない、笑って吹き飛ばそう—

日 時 6月9日(土) 午後1時30分～3時

場 所 本館3階講堂

講 師 神経内科 主任部長 狭間 敬憲

(先着100名 参加費無料)

【(予告) やすらぎ亭に初登場 — 太神楽曲芸・魅せます! 豊来家玉之助 — 】

天満天神繁盛亭、NHK 上方演芸ホール、ニューヨークブロードウェイNY 繁盛亭で大活躍の玉之助さんが来演! 傘回し・皿回し・ひとつ毬・ばちのきょくどり・ながばち・雲水など日本の伝統の和風曲芸の粋を届けます。

日 時 7月3日(火) 午後2時～

場 所 本館3階講堂

出 演 豊来家玉之助

(入場無料)

Topics

【(継) どうだんつつじ(満天星)が咲く4月! やすらぎのプロムナード

—北側通路周辺—

やすらぎのプロムナードで毎年控えめながら一斉に美しい可憐な花をつけ、見るものをなごませてくれるのがどうだんつつじ(満天星)。今年も厳しい冬をたくましく耐え抜き、開花の季節がやってきました。今月下旬にはプロムナードでは、薄ピンクの花びらを一斉に咲かせて、皆さん方に清楚で華やかな姿をお見せすることになるでしょう。

今月のコンシェルジュ

【(新) コンシェはどんな人?—深井翔子コンシェルジュの巻—】

深井「こんにちは。私は、当センターに勤めさせていただいてまだ4か月しか経っておらず、やっと馴染んできたかなと思うこの頃です。私は以前、当センターと同じシステムの病院を受診した時に、システムがよくわからずに『赤ファイル』にあたる会計用のファイルを持って、支払機前の椅子に腰掛けてずっと待っていたことがありました。その時が初めての受診でしたが、十分な説明もし

ていただけず、とても困りました。このため、初めてコンシェルジュというお仕事を知った時、とてもいいサービスだと思いました。

ですので、常にその時のことを忘れず、私のように患者さんが少しでもお困りにならないよう、心を込めてお手伝いさせていただきたいと思って勤務しておりますので、よろしくお願いいたします。」

その他のお知らせ

【(継) やすらぎ通信はメルマガで！】

「やすらぎ通信」は、メルマガでも配信しております。ご希望の方は、当センターホームページからアドレスを登録していただきますようお願いいたします。なお、ホームページのご検索は、「大阪府立急性期・総合医療センター」にて可能です。

【(継) 医療費の支払いはキャッシュカードでできます！】

当センターの医療費自動精算機は、デビットカード対応となっておりますので、ほとんどの金融機関のキャッシュカードでお支払いができます。

これらの金融機関はJ-Debitに加盟していますので、キャッシュカードに自動的にデビット機能が付与されているからです。(ただし、キャッシュカードでお支払いいただいた場合は即座に口座から引き落とされることとなるため、口座に引き落とし金額以上の残高が必要ですのでご注意ください。)

このため、医療費の支払いのための現金を持たなくても、キャッシュカードさえあればお支払いが可能です。

また、引き落としの手数料は不要ですので大変便利です。是非ご利用ください。

なお、合わせて一般のクレジットカードでのお支払いもできます。

当センターは、当センターが「希望の医療空間」「よろこびの医療空間」「やすらぎの医療空間」となるよう日々努力しています。